

義門の研究

三木幸信 著

義門は江戸末期の真宗の僧侶であり、かつ偉大な国語学者であつた。義門の国語研究は聖教研究のためのものであつたが、宗学者からはそれほど注目されていない。三木幸信博士は、つとに義門に関心をもたれ、ここに長年の研究の成果をまとめられた。千三百頁を超える大部のもので、まことに労作の名にふさわしい。本書は二編にわかれ、第一編は「義門の伝記に関する研究」で、少年時代・修業時代・研究時代・完成時代とにわかれる。第二編は「義門の学問並びに著述に関する研究」で、義門の思想や研究態度にふれるとともに、その数多い著述に

ついて一々詳細に調査、考究している。最後に「義門年譜」「義門研究資料目録」等が添えられている。本書は、従来の研究をふまえてつゞき幾多の新見をもつ、義門研究の集大成であるともいえよう。将来の義門研究は本書をふまえなければなるまい。

A5版一三四五頁・昭和三八年
三月刊・六五〇〇円・風間書房

(山本)

歎異抄の語学的解釈

姫野誠二 著

『歎異抄』の教理的解釈書は多いが、純語学的に取扱つたものは少ない、しかも語学的解釈こそ他のあらゆる解釈に先行すべきだという立場から筆をとつたと

著者はいう。本書は「解説」「校異篇」「訂文・解釈篇」の三つから成る。「校異篇」では蓮如本を底本とし、これと室町時代の他の六種の写本(端ノ坊本・毫撰寺本・光徳寺本・妙琳坊本・竜谷大学本・端ノ坊別本)とを校異しており、「訂文・解釈篇」では『歎異抄』の全条にわたつて、各条ごとに、本文をあげ語句の註をなし口語訳をそえている。多屋頼俊博士に『歎異抄新註』の著があるが、本書の著者もその書に負うところが大きいといっている。ともあれ本書は、底本に蓮如本を用い、一二未紹介の写本とも校合している点、注目すべきであろう。

A5版・一九二頁・昭和三八年
三月刊・八〇〇〇円・あそか書林

(山本)